

8508 「ねえ、きみ、電話する、僕の方から・・・」

「ねえ、きみ、電話する、僕の方から電話を入れるよ。」

僕の方から電話をする、とさりげなく言われる別れの言葉には、何時がない。何ひとつとして約束していないのである。そのことすぐ気がつく女も大勢いる。

「じゃ、何時電話くれる?」と、念を押す女も中にはいるだろう。だが大抵の女は黙っている。僕の方から・・・というニュアンスの中に、何時?を言わせない何かが感じられるからだ。

森 瑛子『さよならに乾杯』

[許容訳例]

“Well, then, I’ll call you later ‘from my side’.”

The phrase “I’ll call you later.”, uttered casually on parting, implies no promise as to ‘when.’ The man in uttering it, sets up no appointment at all. Many women of course notice this at once.

Probably some will insist: “When, then?” But most women keep silent, for there seems to be something in that “from my side” which checks the question.

[翻訳例]

“Look. Why don’t I call you? From my side, right?”

“From my side”: the parting words, uttered so casually, say nothing about *when*. There is nothing in the way of promise. Many women will notice this at once.

Some, I imagine, will press the point: “Yes, but when?” But the average women will keep quiet. In that “from my side, right?” she senses some overtone that forbids the question.

■ 「ねえ、きみ、電話する、僕の方から電話を入れるよ。」(8508)

★「ねえ、きみ、」の「ねえ」は注意をうながし、思いついたことを言う切り出しですから “Look” とか “Here” がいいでしょう。“Well, then…” は「じゃ、・・・しよう」の感じです。

●原文を変える

日本語は非常に自由な言語で、一つの文の中に直接話法も間接話法も好きなだけ混ぜて使うことが出来ます。それは「時制の一致」がないからでしょう。私たちは頭の中で考えたとおりに書くことができるのです。しかし、英語ではそうはいきません。直接話法には直接話法を使うだけの理由。つまり、「人の言った言葉をそのまま」伝えることによって効果を出すとかの理由があります。ということは、「言った内容」を伝えるには、間接話法でも直接話法とほぼ同じことを伝えることができるということです。たとえば、He said, “Ah! You’ve got a new hat, I see.” という意味や感情は He commented on my new hat. で伝えることができるのです。したがって、与えられた日本文に必要以上に直接話法が含まれ

ていたら、それを間接話法、つまり「地の文」に改めて英語に変えなければならないこともあるし、また逆に、地の文の中に用いられている直接話法的な言葉は、はっきり直接話法にするか、間接話法にするか、地の文にするか決めなければなりません。この場合、「電話する、僕の方から電話を入れるよ」は後で何回も「僕の方から」が出てくるので、独立して取り出せるように、「僕の方から、僕が君に電話をする」とまとめた方がいいと思います。

★「僕が君に電話する」は、この日本文で最も難しいところです。「電話する、僕の方から電話を入れるよ」と言っておきながら、それが‘約束’にならないようにするには、どんな風に言えばよいかということです。普通、「僕が君に電話する」は I'll call you.ですが、ここでこれを使うと‘約束’になってしまふので，“Why don't I call you?”とします。これは特に若い人が使う表現で、アメリカ人もよく使うと思います。これは I'll call you.とほとんど同じ意味ですが、形としてはっきりとした約束にはならないわけです。疑問文でありながら決して相手の答えを期待するような suggestion ではなく、あくまでも「・・・するよ」という感じで使うわけです。したがって、ちょっと誠意ないような場合にも使われる表現です。なお、ここでは、later (同じ日の内に) は不要です。

★「電話する」は I'll phone you. なら可能ですが、I'll make a telephone call は「誰かに電話をかける」ということ(e.g. Excuse me a moment. I have to make a telephone call.)で、特定の人に電話をかける場合には使いません。put in [through] a phone call to ~は日常生活で普通に使う言い方ではありません。また、ring somebody up は「突然呼び出す」というニュアンスで、ここでは適当ではありません。

★「僕の方から」は from my side ぐらいです。ここでは“From my side, right?”と使うといいと思います。right は、どちらかと言うとアメリカでよく使うと思いますが、念を押すような言い方になります。

■「僕の方から」とさりげなく言われる別れの言葉には何時がない。(8508)

★「さりげなく」は so casually がいいです。nonchalantly は「全く周囲に無関係に」といったニュアンスが強ないので、間違いとは言えませんが不適切です。

★「言われる」は主語が「別れの言葉」ですから are uttered でしょう。もう少し簡単な言葉を使うのなら are used です。なお、are remarked はここでは使えません。この動詞は to say that…と同じように that…と使うのが普通です。

★「別れの言葉」は the parting words です。the farewell words も許されるでしょう。辞書には the farewell speech も出ていますが、これは「お別れの演説・挨拶」で、不適切です。ここでは男女の最後の今生の別れ、というのではなく、軽い意味の別れをさしているように思われるからです。

●「隠れ連体修飾節〔の〕+不定代名詞的体言」(別れ〔の〕言葉)

「別れの言葉」は「別れるときに言われる言葉」を端折ったものですから、the words which are uttered on parting とすることも可能です。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言（さりげなく言われる別れの言葉）

「「僕の方から」とさりげなく言われる別れの言葉は「連体修飾節（「僕の方から」とさりげなく言われる）+体言（別れの言葉）」です。英語では「名詞(the parting words)+関係詞節 (which are uttered so casually) となります。which are を省いて分詞構文として使うこともできます。

★ 「何時がない」は say nothing about *when* です。なお、There is no *when* in the parting words uttered so casually という文も可能です。when はイタリックにしたいです。

■ 何ひとつとして約束していないのである。 (8508)

★ 「何ひとつとして約束していないのである」は「何ひとつ約束(といえるもの)がないのである」と考えます。There is nothing in the way of promise.(どこを見ても約束らしいところ[約束と解釈できるようなもの]がない)とか、The words imply no promise as to *when* ['when']とかでしょう。ちょっと珍しい表現ですが set up an appointment という表現も可能です。In uttered them, the man sets up no appointment at all のように使えます。

■ そのことにすぐ気がつく女も大勢いる。 (8508)

★ 「そのこと」とは、すぐ上で述べたことなので、英語的には「このこと」で this です。つまり、the fact that he has set up no appointment at all を指します。

★ 「・・・な女も大勢いる」は many women とか、会話的な感じがしますが a lot of women も使えます。なお、many a woman は文学的と言うか、rhetorical な表現になります。たとえば、Many a woman will know from bitter experience the truth of what I am saying. のように、何か相手に訴えるような主観的なニュアンスが入ります。

★ 「すぐ」は at once でしょう。

★ 「気づく（→気がつく）」には notice(視覚・聴覚などで気づく・わかる) とか perceive(感知する)とか、realize(意図・意味を理解する)などを使うことが出来ます。

◆ 傾向の will

「すぐ気がつく女も大勢いる」は Many women notice this at once. でいいのですが、「～の場合は当然・・・となる」というニュアンスを含めて will notice とすることが出来ます。この will は文法書では「傾向の will」と説明されている will で「・・・の傾向にある；・・・の場合は当然・・・となる」という感じです。現在時制が「いつも・必ず・・・する」に對して will は「～の場合、得てして・・・する・なる」という感じです。

■ 「じゃ、何時電話してくれる？」と念を押して言う女も中にはいるだろう。 (8508)

★ 「じゃ、何時電話してくれる？」は When will you, then? でもいいですが、「電話してくれる」の部分はくどくなるので省いて“Yes, but when?”でいいです。“When, then?”でもかまわないと思います。

★ 「念を押す」は、ここでは単に「確認のために念を押す」ということではなく「それだけでは満足[納得]できず、さらに詳しいことを聞く」という感じですから press the point です。あるいは「強く要求する」と解すれば insist も使うことが出来ます。辞書で「念を押

す」に当ててある call one's special attention to ~ ; remind ~ of something; make sure of ~ [that…]は「確認のために念を押す」の場合なので、ここでは使うことができません。なお、go so far as to say, …も使えません。この表現は、むしろ言葉の内容を指す場合に使うものです。たとえば、I wouldn't go so far as to call him a fool, but …（彼は馬鹿者とまでは言えないかもしれないが、…）のように使うものです。つまり、相手に対して言いにくいことをはっきりと勇気を出して言うような場合によく使う表現です。

★[～も中にはいるだろう]は some will…, I imagine, …とすればいいでしょう。will に「だろう」は含まれていないので、I imagine で表します。あるいは、代わりに probably でもいいでしょう。

■だが大抵の女は黙っている。 (8508)

◆「大抵の女」は most women です、most of women とは言えません、most of は‘most of the [these; those; one's]’+複数可算名詞’の形で使います。なお、ここでは「普通の；一般的の」という意味で average を使って average women でもいいです。

★「黙っている」は keep quite とか stay silent など。keep silence でも間違いではありませんが、ちょっと古めかしい表現になります。

■僕の方から…というニュアンスの中に、何時？…を言わせない何かが感じられるからだ。 (8508)

★「…というニュアンスの中に」の「…というニュアンス」は訳す必要はありません。たとえば、in that “from my side, right?”とすれば、この直接話法の言葉を出すことによって「…というニュアンス」は含まれてしまうからです。

★「何時？…を言わせない」は checks the question “When, then?”でもいいですが、もっと英語的に簡潔にすると forbids the question です。the question と言えば、どの質問かわかりますから「何時？」(“When, then?”)は省くことが出来ます。

★「何か」は something ですが、「何時？を言わせない…」と続くので「含み」というニュアンスを加えたいと思います。したがって、something about the tone of…とか some overtone としたいです。

●「連体修飾節+不定代名詞的名詞」(何時？を言わせない何か)

「何時？を言わせない何か」は「連体修飾節（何時？を言わせない）+不定代名詞的体言（何か）ですから、英語では「代名詞(something…)+関係詞節(which checks the question “When, then?”)とか「名詞(some overtone)+関係詞節(that forbids the question)」とかでしよう。

★「感じられる」は there seems to be ~ (～があるように思われる) とか、主語を she にすると she senses…です。

★「…から」ですが、for…とか because…を使っても決して間違いでありませんが、長い文があって最後に「…からだ」となっているような場合、強いて「…から」を訳す必要がないことがしばしばです。不安であるなら、前の文の最後をセミコロンかコ

ロンにする方法をとってもよいと思います。